

日本語の結果の副詞文の意味及び構文的特徴 アスペクト的側面から

黄 春玉

1. はじめに

結果の副詞¹は述語動詞が自動詞の場合は主体の状態を表し、他動詞の場合は対象の状態を表す。次の例を見てみよう。

- (1) a. 服がどろどろに汚れた。
b. 服がどろどろに汚れている。
(2) a. 彼は服をどろどろに汚した。
b. ?彼は服をどろどろに汚している。

例(1)では述語動詞「汚れる」は自動詞であり、結果の副詞「どろどろ」は主体である「服」の状態を表す。例(2)では述語動詞「汚す」は他動詞であり、結果の副詞「どろどろ」は対象である「服」の状態を表す。そして、意味から見てみると、例(1)の結果の副詞「どろどろ」と述語動詞「汚れる」はともに主体「服」の状態を表すものであるので、限定成分の「どろどろ」は述語動詞「汚れる」の表す状態の意味の中の一つと見ることができる。すなわち、「どろどろ」は「汚れる」に内属²すると考えることができる。一方、例(2)では述語動詞「汚す」は主体の動作を表し、結果の副詞「どろどろ」は対象の状態を表す。そのため、例(2)の「汚す」と「どろど

¹ 結果の副詞とは「動きが実現した結果の主体や対象の状態のあり様に言及することによって動きの実現のされ方を示す副詞的成分」(仁田1983, p. 125)のことを指す。

² 内属については仁田(1983)は「動きそのものが有している諸側面の一つを取り挙げて、それがいかなる様子のものであるかを示す」(p. 124)と述べている。これを受けて本稿は動きだけではなく、状態にもその内属するものがあると考えている。

黄 春玉

る」の間には例(1)のような内属関係は考えにくい。この意味的な内属関係の相違はアスペクトにも現れる。例(1b)では「どろどろ」は「汚れる」と結合して、その全体が一つの状態の質に対応するするため、「ている」と共起できるが、例(2b)では「どろどろ」は「汚す」と全体として一つの動作や状態の質³に対応しないため、「ている」とは共起できない。

このように、結果の副詞文は述語動詞の自・他によって異なる意味及びアスペクトの特徴が見られる。本稿は述語動詞の自・他によって結果の副詞文を分類したうえで、その意味及びアスペクト的特徴を見ていくことにする。

2. 先行研究とその問題点

結果の副詞に関する先行研究にはまず仁田(1983)が挙げられる。仁田(1983)は様態の副詞は「動きそのものに内属する側面の様子に言及することによって、動きが実現される際の実現のされ方を表しているもの」(p. 125)とし、結果の副詞は「動きが実現した結果の主体や対象の状態のあり様に言及することによって動きの実現のされ方を示す副詞的成分」(p. 125)としている。すなわち、仁田によると、様態の副詞と結果の副詞の違いは、前者は「動きそのものに内属する側面の様子に言及する」ものであり、後者は「動きが実現した結果の主体や対象の状態のあり様に言及する」ものであるということになる。そうであるとすれば、結果の副詞は「動きそのものに内属する側面の様子に言及する」ものではないと考えることができるようであるが、仁田はこのことに言及していない。

結果の副詞は主体や対象の状態を示すものであるとすれば、それは動きそのものに内属しないと考えてよいと思われる。しかし、述語動詞は動きだけではなく、動作・作用・変化・状態のいずれでもある。すなわち、状態を表す結果の副詞は状態を表す述語動詞に内属するということもありうる。本稿はまず、この内属の問題を明確にする。

また、中北(1996)は「結果の副詞の意味的な機能がモノの属性の叙述それ自体ではなく、あくまで動作の限定であるためである」(p.124)と述べている。しかし、

³ 仁田(1983, p. 122)の用語である。「質」は語の文法的意味または語彙相を示すものである。

例えば、「上着がぼろぼろに破れている」の述語動詞「破れている」は動作ではなく、状態を表すものである。この場合、結果の副詞「ぼろぼろ」と述語動詞「破れる」はともに「上着」の状態を描写・叙述している。したがって、中北(1996)の「あくまで動作の限定」という説明は不十分であると考えられる。これを踏まえて、本稿では述語動詞の表す意味特徴から結果の副詞文を見ていくことにする。

3. 日本語の結果の副詞文の二タイプ

日本語の結果の副詞文は述語動詞の自・他によって異なる意味を表すと考えられる。その違いは「た」や「ている」との共起から分かる。

- (3) a. 服がぼろぼろに破れた。
- b. 服がぼろぼろに破れている。
- (4) a. 彼は服をぼろぼろに破った。
- b.? 彼は服をぼろぼろに破っている。

例(3 a)は動作の完了ではなく、変化の完了を表している。そして、例(3 b)が成立することから、「破れる」のような自動詞によって構成されている結果の副詞文は結果の状態を表せることが分かる。一方、例(4 a)は「破る」という動作の完了の後、「上着」が「ぼろぼろ」の状態になっていることを表す。そして、例(4 b)が成立しないことから、「破る」というような他動詞によって構成されている結果の副詞文は結果の状態を表さないことが分かる。このように、自動詞と他動詞によって構成されている結果の副詞文は、異なる意味を表すことが分かる。本稿は例(3 a)のように主体に状態変化が起こることを表す結果の副詞文を「結果の状態文」と呼び、例(4)のように動作の完了の後、対象に状態変化が起こること表す結果の副詞文を「結果の達成文」と呼ぶことにする。「結果の状態文」では述語動詞は動作ではなく、主体の状態変化を表す。そのため、このような述語動詞は「ている」と共起して動作の持続ではなく、結果の状態を表す。このような動詞には「破れる、壊れる、割れる、砕ける、痩せる、太る、折る、濡れる、乾く、伸びる、切れる、焼ける」等のような主体状態変化動詞が挙げられる。一方、「結果の達成文」では述語動詞は、対象の状態変化という結果的意味を含意するもの

黄 春玉

の、基本的に主体の動作を表すものである。このため、このような述語動詞は「ている」と共起して結果の状態ではなく、動作の持続を表すこととなる。このような動詞には「破る、壊す、割る、磨く、塗る、切る、砕く、折る、濡らす、乾かす、編む、伸ばす、焼く」等のような主体動作・客体変化動詞⁴が挙げられる。

以上のように、「結果の状態文」と「結果の達成文」の二分類は基本的に述語動詞に「結果の状態」の意味があるかないかによる。しかし、「染める」のような動作の継続と結果の状態の両方を表す他動詞は「結果の達成」と「結果の状態」の両方を表すことができる。

4 . ニタイプの結果の副詞文の意味及びアスペクト的特徴

4 . 1 内属関係

「内属」については仁田(1983)は、「動きそのものが有している諸側面の一つを取り挙げて、それがいかなる様子のものであるかを示す」(p . 124)として、次のように説明している。例えば、「ゆっくり破る」「のろのろ立ち上がる」等においては「ゆっくり」と「のろのろ」はそれぞれ「破る」と「立ち上がる」という動作の「速さ」の側面を取り挙げて、その様子を示すものであるので、「ゆっくり」と「のろのろ」はそれぞれ「破る」と「立ち上がる」に内属するとされている。そして、このような内属関係にあるものは、例えば「のろのろ立ち上がる」は「立ち上がる(速さ)はのろのろだ」を意味するとされている。仁田(1983)では動きを表す述語動詞に様態の副詞が内属することを強調しているが、本稿では状態を表す述語動詞に果の副詞が内属する点に注目したい。次の例を見てみよう。

(5) 壁は粉々に崩れている。

(6) 服はべとべとに濡れている。

例(5)(6)では結果の副詞「粉々」、「べとべと」はそれぞれ述語動詞「崩れている」、「濡れている」の表している状態の具体的な様子を示している。すなわち、

⁴ この用語は工藤(1995)のものであるが、ここで挙げた動詞は基本的に仁田(1983)による。

「粉々」、「べとべと」はそれぞれ「崩れている」、「濡れている」の表す状態の中の一つと見ることができる。そして、これらの結果の副詞は状態に内属する側面を取り挙げるのであるから、例えば、「粉々に崩れた」は「崩れた(状態)は粉々だ」を意味することになる。したがって、結果の副詞は結果の状態を表す述語動詞に内属すると見ることができる。内属は動きや状態そのものが有する諸側面の一つを取り挙げるものであるとすれば、動作を表す動詞には動作の過程を表す副詞的成分が内属し、結果の状態を表す動詞には結果の状態を表す副詞的成分が内属することになると予想される。言い換えれば、動作を表す動詞には結果の状態を表す副詞的成分が内属しにくく、結果の状態を表す動詞には動作の過程を表す副詞的成分が内属しにくいと思われる。次の例を見てみよう。

- (7) a. 彼は教室で机にペンキをゆっくり塗っている。
 b. ? 彼は教室で机にペンキを白く塗っている。
- (8) a. ? 机がゆっくり壊れている。
 b. 机がばらばらに壊れている。

例(7)の述語動詞「塗る」は「ている」と共起するとき、動作を表し、結果の状態を表さない。そのため、動作過程の様態を表す副詞「ゆっくり」は述語成分「塗っている」と共起するが、結果の状態を表す副詞「白く」はそれと共起しない。「ゆっくり」は「塗る」の動作過程の一側面(速さ)を取り挙げて、その様子を示すことはできるが、「白く」はできない。このことから、「ゆっくり」は「塗る」に内属するが、「白く」は「塗る」に内属しないと考えられる。一方、例(8)の述語動詞「壊れる」は「ている」と共起するとき、動作を表さず、結果の状態を表す。そのため、副詞「ゆっくり」は述語成分「壊れている」とは共起しないが、「ばらばら」は共起する。すなわち、「ゆっくり」は「壊れる」の結果の状態の一側面を取り挙げて、その様子を示すことはできないが、「ばらばら」はできる。したがって、「ゆっくり」は述語動詞「壊れる」に内属しないが、結果の副詞「ばらばら」はそれに内属すると考えられる。

以上の分析で、結果の副詞は動作動詞とは内属関係を形成しないが、結果の状態を表す動詞とは内属関係を形成することができると考えられる。

黄 春玉

4.2 内属関係からみた二タイプの結果の副詞文の意味及びアスペクト的特徴

結果の副詞文の二タイプにおいて、「結果の達成文」では述語動詞が結果の状態を表さないため、結果の副詞が述語動詞に内属しないが、「結果の状態文」では述語動詞が結果の状態を表すため、結果の副詞が述語動詞に内属することは前述した。また、内属関係にある結果の副詞と述語動詞はその全体が一つの動作や状態の質に対応するのであれば、アスペクト形式においては結果の副詞と述語動詞はいずれも「ている」と対応する。一方、内属関係にない結果の副詞と述語動詞はその全体が一つの動作や状態の質に対応しないことによって、アスペクト形式においては結果の副詞と述語動詞はいずれも「ている」と対応することはできない。次の例を見てみよう。

- (9) ガラスは粉々に割れている。
 (10) ?山田はガラスを粉々に割っている。

例(9)では述語動詞「割れる」は結果の状態を表すことができるので、結果の副詞「粉々」は述語動詞「割れる」に内属すると考えられる。そして、「粉々」と「割れる」はその全体として一つの状態の質に対応するので、結果の状態を表す「ている」と共起できる。一方、例(10)では述語動詞「割る」は動作を表し、結果の副詞「粉々」は結果の状態を表すものであることによって、両者の間には内属関係がないとみることができる。すなわち、「粉々」は状態の質に、「割る」は動作の質にそれぞれ対応し、両者は全体として一つの動作や状態の質に対応することはできない。したがって、例(10)では「粉々」は「割る」と結合して、「ている」と共起することはできない。このことは更に多くの表現例からその一般性が見られる。

- (11) 鞆がぼろぼろに破れている。
 (12) 髪が黒く染めている。
 (13) ?山田は葱を細かく切っている。
 (14) ?山田は車をぴかぴかに磨いている。

例(11)(12)では述語動詞「破れる」「染める」は結果の状態を表すことができるので、結果の副詞「ぼろぼろ」と「黒く」はそれぞれ述語動詞「破れる」と「染める」に内

属すると考えられる。したがって、例(11)の「ぼろぼろ」と「破れる」及び例(12)の「黒く」と「染める」はそれぞれその全体として一つの状態の質に対応して、結果の状態を表す「ている」と共起できるのである。一方、(13)(14)では述語動詞「切る」「磨く」は結果の状態を表すことができないので、結果の副詞「細かく」「ぴかぴか」はそれぞれ述語動詞「切る」「磨く」に内属しない。そのため、結果の副詞「細かく」「ぴかぴか」は述語動詞「切る」「磨く」と全体として一つの動作或いは状態の質に対応することはできない。したがって、例(13)(14)は成立しないこととなる。

以上から、結果の副詞の二タイプにおいては「結果の状態文」は結果の副詞と述語動詞は内属関係にあるので、「ている」と共起するが、「結果の達成文」は結果の副詞と述語動詞は内属関係にないことによって、「ている」と共起しないということが明らかとなった。

5. まとめ

本稿は日本語の結果の副詞文を述語動詞の自・他によって「結果の状態文」と「結果の達成文」の二タイプに分類したうえ、その意味及びアスペクト的特徴を見てきた。その結果、「結果の状態文」は結果の副詞と述語動詞は意味的には内属関係があり、アスペクト的には両者が全体として「ている」と対応するが、「結果の達成文」は結果の副詞と述語動詞は意味的な内属関係がないことによって、両者が全体として「ている」と対応することはできないことが明らかとなった。

参考文献

- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』 ひつじ書房
寺村秀夫 (1981) 『日本語の文法(下)』 国立国語研究所大蔵省印刷局
(1991) 『日本語のシンタクスと意味 III』 くろしお出版
中北美千子 (1996) 「結果の副詞の適格性に関する意味的要因」 『日本語教育』 89号 日本語教育学会
金水 敏 (2000) 『時・否定と取り立て』 金水敏他編岩波書店

- 仁田義雄(1983) 「結果の副詞とその周辺」『副用語の研究』渡辺実編明治書院
(1997) 『日本語文法研究序説』くろしお出版
(2002) 『副詞的表現の諸相』くろしお出版
- 早津恵美子(1995) 「有対他動詞と無対他動詞の違いについて」『動詞の自他』ひ
つじ書房
- 宮島達夫(1994) 「動詞の意味範囲の日中比較」『語彙論研究』むぎ書房
- 楊 凱栄(1994) 「他動性における意図と結果」『言語理論と日本語教育の相互活
性化』津田日本語教育センター